

モンシロチョウやアゲハチョウについて皆さんがよく目にしているキチョウの紹介です。このキチョウは東北を北限として八重山諸島まで広く分布しますが、1992年に八重山地方のキチョウとは種として区別できるわずかな違いのあることがわかって、八重山産をキチョウ（別名ミナミキチョウ）、それより北に分布するキチョウをキタキチョウと呼ぶことになりました。このキタキチョウについては、ごく普通種でありながら、まだまだ解明できていないことがたくさんある、実に興味深いチョウです。例えば、東北地方では青森県でも発見されますが、青森県下で定常的に発生している確証はなく、もっと南の地域で発生して迷い込んだ迷チョウ（その地域では発生していないチョウがたまたま迷い込む場合の呼び方）か、メスの迷チョウが生んだ卵からの一時的な発生だと考えられ、真相解明はされていません。キタキチョウは、春型、春夏中間型（稀）、夏型、夏秋中間型、秋型、晩秋型と、最も多くの季節変異を示します。

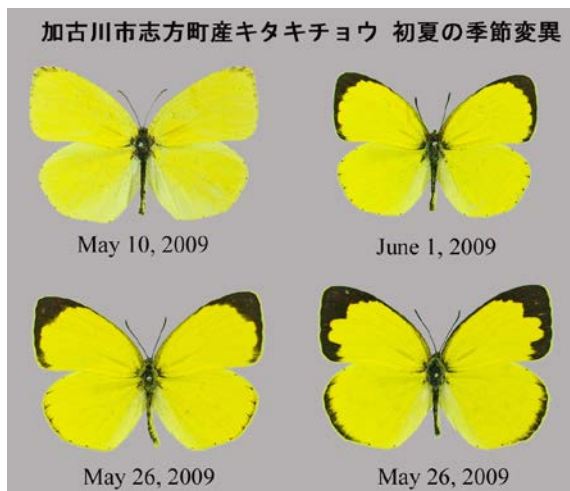
春から夏への移行タイプ：
春夏中間型は2009年に注力して何とか標本を追加できました。5月10日の黒鱗粉が見られない個体は、Apr. 5, 2008の標本を晩秋型としておなじみで、このキタキチョウは晩秋に発生した個体がチョウのままで越冬して、暖かくなった春先から再び活動を始めた結果です。2018年4月13日にはカラスノエンドウで吸蜜する越冬個体の記録をとっています。



Apr. 5, 2008 加古川市志方町 晩秋型



2018/04/13 15:08



加古川市志方町産キタキチョウ 初夏の季節変異

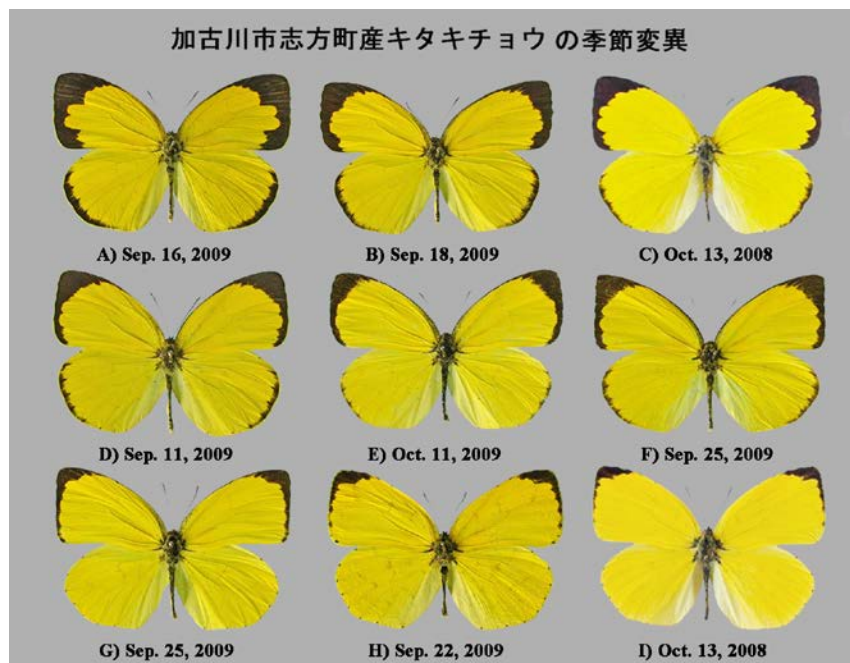
May 10, 2009

June 1, 2009

May 26, 2009

May 26, 2009

次に2008-9年に初秋からの季節変異型にこだわって作製した実際の標本写真を示します。翅表の黒い鱗粉がだんだん薄くなっていく変化が明らかで、まさに、百聞は一見にしかず。初秋型（G）から秋型（I）



加古川市志方町産キタキチョウの季節変異

A) Sep. 16, 2009

B) Sep. 18, 2009

C) Oct. 13, 2008

D) Sep. 11, 2009

E) Oct. 11, 2009

F) Sep. 25, 2009

G) Sep. 25, 2009

H) Sep. 22, 2009

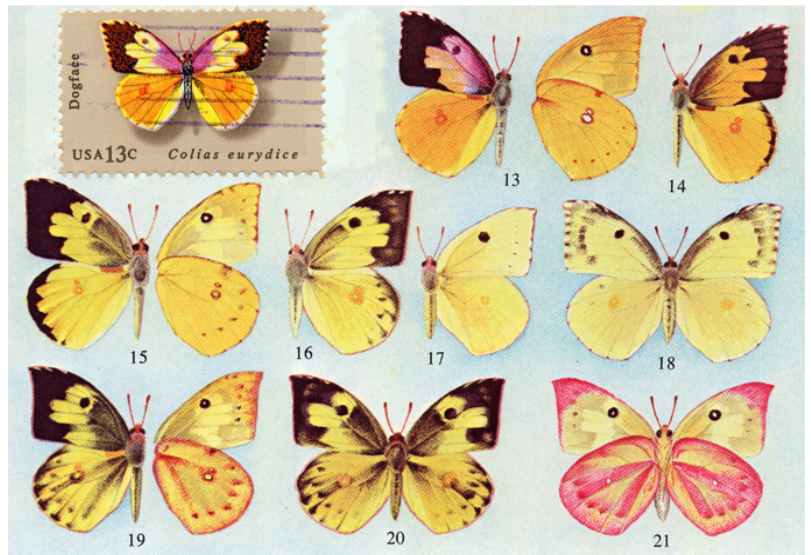
I) Oct. 13, 2008



Oct. 13, 2008 加古川市志方町 夏秋中間型

までわずかに前翅のクロ鱗粉が小さくなっていきます。実は、このキチョウの季節変異については、中学時代の恩師である理科担当の先生から「チョウの標本をただ並べるだけでは研究とはいえない。ごく普通種のキチョウに関してもわかっていないことがいっぱいある。そういう視点でチョウたちと接しなさい」と諭されたことがあり、その後、チョウの生態研究が私のライフワークとなりました。写真に示した標本記録中面白いのは、2008年10月13日、加古川市志方町の同一場所・同時刻に、準夏型（C）、夏秋中間型（下図）、そして秋型（I）が混在していたことです。翅表の黒い鱗粉の発達は、幼虫時代の日照時間、気温などの影響が大きいと考えられますが、全く同じ地域で同じ時期に育ったはず

のチョウが 3 種類の季節型として発生している事実は、なんと説明していいのかわかりません。なお、あえて準夏型だと区別したのは Sep.9,2008 の夏型と比べれば前翅黒鱗粉の発達度に明確な差があることで納得していただけるでしょう。この夏型前翅の黄色部分に注目すると、ある種の犬の横顔に似ていますよね。アメリカには目玉模様まである Dogface と呼ばれるモンキチョウの仲間がいて切手にもなっています。越冬母チョウが産卵をして育った第一化発生個体が 5 月頃からみられ、その中に春夏中間型が混じります。キタキチョ



ウはハギ類、ネムノキ、クサネム、ニセアカシアなどの葉っぱや花を食エサとして育ちます。松波町周辺では、ヌスビトハギなどで発生しています。2008 年、志方町の水田横に自生しているクサネムで産卵場面に出くわし、持ち帰って飼育した際の羽化直前の蛹と羽化後のキタキチョウの写真を示します。2009 年 3 月西畑花畑では暖かくなってもなかなかチョウが飛びませんでした。ようやく 18 日、越冬後のキタキチョウが目覚まして遊んでいました。

チョウが交尾をしている姿を観察できる機会はきわめて少なく、まさに偶然出会えるという光景ですが、本種については 2012 年と 2017 年 7 月に撮影記録が撮れています。

Oct. 12, 2012 田園地帯秋のチョウ

秋晴れの午前中、久しぶりに黄金の稲穂が揺れる田園地帯を自転車で巡り、まずはクサネムが繁茂する路傍の休耕田にキタキチョウが群れ飛ぶ光景をみる。あぜ道を伝って歩を進めると、クサネムの茎に静止する交尾中の新鮮ペアが見つかる。すぐ上方には蛹の抜け殻があって、おそらく羽化したばかりの♀に探



雌中の♂がすばやくアタックしたものと思われる。このペアの撮影を終えて全体を見渡すと、さらに別の 2 ペアが目に入る。単独で飛び回る個体をネットインして調べると、前翅外縁黒紋が幅狭くなった夏型終盤型と、前翅端だけに黒鱗粉が残る秋型が混じっている。

